九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第6回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

https://doi.org/10.15017/21651

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 6, 1982-01-25. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

1．第6回九州地区国立大学間合宿共同授業実施要項

1．目　　的　九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。

2．メインテーマ　「現代社会の諸問題」

3．主　　管　九州大学教養部

4．会　　場　1．九州地区国立大学島原共同研修センター（島原分校　当番校：長崎大学）
島原市礫石原町甲1201〈ＴＥＬ 09576－4－2201〉

2．国民宿舎　青雲荘（雲仙分校　当番校：九州大学）
（ユースホステル）
長崎県小浜町雲仙500－1〈ＴＥＬ 095773－3273〉

5．開催期日　昭和56年7月11日（土）～15日（水）の4泊5日間

6．参加資格　九州地区国立大学に在籍する学生（教養部をもつ大学においては教養部学生）で当該大学が指定する者。

7．募集人員

	島原分校	雲仙分校	計
	人	人	人
福岡教育大学	5		5
九州大学	20	20	40
九州芸術工科大学		6	6
九州工業大学	5		5
佐賀大学	10	10	20
長崎大学	8	8	16
熊本大学	10	10	20
大分大学	5	4	9
宮崎大学	5	4	9
宮崎医科大学		6	6
鹿児島大学	8	8	16
琉球大学	14	14	28
計	90	90	180

8．日　　程　別紙日程表のとおり

9．講師と講義題目

島原分校

(1)「激変する世界政治」	宮崎大学助教授 小沼　新
(2)「地域史と地域主義」	
－ヨーロッパの現代歴史学の動向－	佐賀大学教授 前間良爾
(3)「日本と東南アジア」	
－その史的背景と漢文化－	鹿児島大学助教授 新田栄治
(4)「島原松平藩の蒐書」	福岡教育大学教授 笠　栄治
(5)「アメリカ詩の伝統と現代性」	九州工業大学教授 野田　寿
(6)「言葉への反省」	熊本大学助教授 北川浩治
(7)「新しい生理学的指標と先天性風疹症候群児」	琉球大学助教授 今塩屋隼男
(8)「現代人の生活環境と健康・体力」	
－坂の長崎のプラス面を探る－	長崎大学助教授 田原靖昭
(9)「太陽熱の冷暖房設備について」	大分大学教授 岡田英彦
(10)「科学と価値」	九州大学教授 後藤賢一

雲仙分校

(1)「巨大科学と科学者」	長崎大学助教授 常石敬一
(2)「近代ヨーロッパの魔女狩りとその歴史的背景」	九州大学助教授 志垣嘉夫
(3)「音楽と社会」	宮崎大学講師 垣内幸夫
(4)「現代の健康観についての一つの考え方」	
－ストレスと適応の立場から－	鹿児島大学助教授 徳田修司
(5)「価値観の多様化と現代社会」	九州芸術工科大学教授 根井康雄
(6)「女性の社会的権利について」	九州大学教授 深山喜一郎
(7)「マルチ・イメージシステムと現代教育」	宮崎医科大学外国人教師 ロバート・アダムス
(8)「タイ北部山岳民族の社会」	琉球大学教授 比嘉政夫
(9)「虚構と小説」	九州大学教授 野口健司
(10)「今日のオーストラリア事情」	大分大学講師 金子光茂
(11)「文学から見たアメリカ社会」	熊本大学助教授 中島最吉
(12)「文学と社会参加」	佐賀大学教授 小柳保義

10. 参加申し込み

(1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費を添えて申し込むこと。

ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。

(2) 当該大学は、分校毎の参加学生名簿及び教職員滞在計画書を6月20日までに、それぞれの当番校あてに送付すること。

(3) 参加費は、大学毎に一括して7月11日（第1日目）に各分校において払い込むこと。

11. 参加費（食事及び雑費）

7,000円（7月11日夕食から7月15日昼食まで）

12. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは、各大学の判断において行う。

ただし、認定することのできる単位数は2単位までとする。

13. その他

(1) 持参品　筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、登山靴又は底の厚い運動靴で履きなれたもの、雨具（ポンチョ又はビニールカッパ）、水筒、ジーパン（女子）、体育館シューズ（島原分校のみ）、健康保険証、日常使いなれた薬など。

(2) 集　合　参加者は、各大学毎にまとまって7月11日（土）午後4時30分までにそれぞれの分校に集合すること。

(3) 解　散　7月15日（水）午後1時現地で解散するが、参加者は各大学のバスで輸送する。

第6回九州地区国立大学間合宿共同授業（島原分校）日程表

メインテーマ「現代社会の諸問題」

昭和56年度

日＼時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
7月11日(土)	7：30 8：30 10：00 10：30 12：00						車中オリエンテーション 14：30 15：30				受付 自由時間 担当教官打合せ会	オリエンテーション	交歓夕食会		講義「激変する世界政治」 宮大 小沼教官		自由時間	消灯就寝
7月12日(日)	起床	朝食	講義「地域史と地域主義」 佐大 前間教官	休憩	講義「日本と東南アジア」 鹿大 新田教官	昼食	講義「島原松平藩の蒐書」 福教大 笠教官		休憩	講義「アメリカ詩の伝統と現代性」 九工大 野田教官	自由時間 教官打合せ会	夕食	講義についての討議 I （分科会形式によるゼミ）				自由時間	消灯就寝
7月13日(月)	起床	朝食	登山（スポーツ）				昼食	休憩		講義「言葉への反省」 熊大 北川教官	自由時間 教官打合せ会	夕食	講義についての討議 II （分科会形式によるゼミ）				自由時間	消灯就寝
7月14日(火)	起床	朝食	講義「新しい生理学的指標と先天性風疹症候群児」 琉大 今塩屋教官	休憩	講義「現代人の生活環境と健康・体力」 長大 田原教官	昼食	講義「太陽熱の冷暖房設備について」 大分大 岡田教官		休憩	講義「科学と価値」 九大 後藤教官	自由時間 教官打合せ会	夕食	自由討議				自由時間	消灯就寝
7月15日(水)	起床	朝食	全体討議	休憩	全体討議	昼食（反省茶話会）	解散											

第6回九州地区国立大学間合宿共同授業（雲仙分校）日程表

メインテーマ「現代社会の諸問題」　　昭和56年度

日＼時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
7月11日(土)	8：00	8：30		10：00	10：20	11：50 12：00		車中オリエンテーション 14：30		14：50 16：20	受付 自由時間 担当教官打合せ会	オリエンテーション	交歓夕食会 18：30 19：40		講義「巨大科学と科学者」 長大 常石教官	自由時間	消灯就寝
7月12日(日)	起朝 床食	自由時間	講義「近代ヨーロッパの魔女狩りとその歴史的背景」 九大 志垣教官	休憩	講義「音楽と社会」 宮大 垣内教官	昼食	講義「現代の健康観についての一つの考え方」 鹿大 徳田教官	休憩	講義「価値観の多様化と現代社会」 芸工大 根井教官	休憩	講義「女性の社会的権利について」 九大 深山教官	自由時間 教官合せ打会	夕食	討論 I		自由時間	消灯就寝
7月13日(月)	起朝 床食	登山（スポーツ）				昼食	休憩		講義「マルチ・イメージシステムと現代教育」 宮医大 アダムス教官	休憩	講義「タイ北部山岳民族の社会」 琉大 比嘉教官	自由時間 教官合せ打会	夕食	討論 II		自由時間	消灯就寝
7月14日(火)	起朝 床食	自由時間	講義「虚構と小説」 九大 野口教官	休憩	講義「今日のオーストラリア事情」 大分大 金子教官	昼食	講義「文学から見たアメリカ社会」 熊大 中島教官	休憩	講義「文学と社会参加」 佐大 小柳教官	自由時間		自由時間 教官合せ打会	夕食	自由討論			消灯就寝
7月15日(水)	起朝 床食	自由時間	討論 III	休憩	全体討論	昼食	解散										

2．第6回合宿共同授業の講義要旨

(1) 島 原 分 校

① 激変する世界政治

小　沼　　新（宮崎大学）

新冷戦の時代を迎えたとされる現代国際政治の混迷は、何に由来するものであろうか。戦後世界秩序を形成した「米・ソによる平和」を崩壊させた要因が何であったのかを分析する事で、この点は明らかになる。まず第1に、米国中心の資本主義体制内の不均等発展と、それに対応したソ連中心の社会主義体制内の矛盾対立とを歴史的・論理的に見てみたい。ついで、帝国主義と植民地体制の矛盾が爆発した「ベトナム戦争」の持つ意味を明らかにし、1960年を境に噴出する発展途上国の動きを「南北問題」という形で見る。最後に「相互依存」や「連繋」と呼ばれる現代世界の政治・経済関係を平易に説明し、権力政治（パワー・ポリティックス）の再燃の中で、「平和と民主主義」の大切さを確認する為に、私達が考えなければならない条件を提起してみたい。

② 地域史と地域主義
―ヨーロッパ現代歴史学の動向―

前　間　良　爾（佐賀大学）

ヨーロッパ現代歴史学の主要な潮流として、「社会史」があげられる。この「社会史」の概念はきわめて多様であるが、一般に、民衆史を中心とし、その社会経済構造から、生活・習俗・文化にまで及ぶ綜合的な把握が目ざされ、さらに、その実態解明のために、社会史と地域史の関連が特に注目されている。

ヨーロッパを旅すると、一方で、国境を越えたヨーロッパの一体性を強く実感するが、反面、都市や農村の地域主義、地域自治、地域文化の伝統に強烈な印象を与えられる。地域史の伝統もまた、この地域主義と無縁ではない。

これらの問題を、筆者の専攻領域である「宗教改革と農民戦争」の時代に焦点をあてながら、スライドを交えて説明したい。

備　考：スライド使用

③　日本と東南アジア

新　田　栄　治（鹿児島大学）

日本と東南アジアの今日の関係は政治、経済だけにとどまらず、ますます複雑化、密接化している。歴史的にみても深い関係にあり、太平洋戦争、独立運動とのかかわり、日本人町などの近いものから元寇やさらには先史時代にまでさかのぼることができる。東南アジア理解の原点として、中国の統一王朝・漢を中心に、その東と南に生まれた日本と東南アジアの独自の文化とその国家形成への動きについて考えたい。

近年の東南アジア考古学の重要な問題となっている東南アジア青銅器文化（代表例として、ベトナムのドンソン文化）の位置づけと、インドシナでの国家形成（チャンパなど）との関連について、漢帝国の動静を考慮に入れながら、日本における事例と比較することによって論じていく。

④　島原松平藩の蒐書

笠　　榮　治（福岡教育大学）

島原松平文庫が紹介されたのは昭和35年である。島原藩主松平忠房の創設になる国文学研究上珠玉の大コレクションである事が判明、一時学西すの観があった。

忠房は寛文９年（1669）累代の忠節と精励格勤とによって福智山域主から、島原藩七万石の藩主に転封された。集団殉教的島原の乱で無人地帯と化した観のある乱後の島原城主への抜擢移封であったが、封に着いた忠房の経営には見るべきものが多かった。

伊勢の国学者伊藤栄治を招請、日本紀・源氏物語等の国書を講読せしめ、諸藩士にも聴講せしめた。島原藩教学の礎を築いたのである。家臣の勉学のために、多くの和漢の書籍を蒐集して「尚舎源忠房」の文庫を創設したのである。現存蔵書は約一万冊。国書と漢籍（中国からの輸入本も含む）に分かれるが、国文学資料（群書類従本の源流）が珍重。

⑤　アメリカ詩の伝統と現代性

野　田　　寿（九州工業大学）

19世紀以来のアメリカ詩に特徴的な二つの流れ――― Whitman 的なものと Dickinson 的なもの――のそれぞれについて、その特質を明らかにし、両者の対立、拮抗が生み出す緊張状態に、現代アメリカ詩を支えている豊かな創造へのエネルギーの源泉があることを指摘したい。

⑥　言葉への反省

北　川　浩　治（熊本大学）

現代では、意味の言語表現が以前より大きな位置を占め、ことに意味を科学的に表現する傾向が強まっている。それは、さまざまな意味伝達の手段ではりめぐされた社会にあって、意味伝達の可能性そのものに疑いが投げかけられている状況と無関係ではない。言語は意味伝達の手段としては、普遍性・確実性の点で中心的位置を占めているが、同時にかかる消極的側面をも備えているからである。

講義では以上を念頭に置きながら、①言語の逆説的特質を、日常のありふれた言語活動から公共的な「言説の宇宙」に至る言語現象の中で観察し、②その対症療法という意味をもつ科学技術的認識関心に方向づけられた言語解釈の検討を介して、③「知る」ことと言語とがどのようにかかわっているかを考えてみたい。

⑦　新しい生理心理学的指標と先天性風疹症候群児

今塩屋　隼　男（琉球大学）

生理心理学的指標の一つである脳電位には、いわゆる脳波の外に誘発電位、緩電位、定常電位などがある。近年、これらの脳電位変動のうち、誘発電位や緩電位が心理現象をよく反映するものとして注目されだしてきた。特に、緩電位の一種であるＣＮＶ（随伴陰性変動）という現象は、注意、動機づけ（やる気）などの心的現象を、非常によく反映するものとして研究が進められている。

本講義では、まず、このＣＮＶ研究の現状とその意義について述べる。次いで、先天性風疹症候群

児（風疹児）について概説し、各種障害児や正常児のＣＮＶ測定値と風疹児の測定値を比較しながら風疹児の生理心理学的特性について述べる。

⑧　現代人の生活環境と健康・体力

―坂の長崎のプラス面を探る―

田　原　靖　昭（長崎大学）

最近の Jogging や◯◯健康法のブームの背景をどのように解釈したらよいだろうか。運動不足症 Hypokinetic disease なる言葉がみられるようになったのは最近のことである。動脈硬化、高血圧症、心臓疾患、糖尿病、腰痛等の疾患が増加しつつあることは、特に近代文明を享受している先進国共通の課題であろう。

長崎市民の生活環境に目を向けてみた。便利になった生活の中で、坂道や階段道の歩行を毎日の生活の中で余儀無くされている坂上居住者は、平地で快適な生活を営む平地居住者（現代人）に比べて心肺機能（ステップテストのスコア、酸素摂取能等）が優れ、自覚症状の訴え率が低かった。

以上の結果から、我々現代人には、少々不便な生活で survivor たり得る体力を自らの知恵で獲得していくことが必要であろう。

⑨　太陽熱の冷暖房設備について

岡　田　英　彦（大分大学）

Ｓ48年のオイルショック以来、太陽エネルギーの利用が世間の大きな関心をひくようになった。石油も石炭も、元をただせばすべて過去の太陽エネルギーの遺産であるが、注目をあびているのは散漫な太陽エネルギーを積極的に集熱集光、利用しようとするもので、経済的に実用化が難しかったものである。太陽熱により冷暖房を行なうこともその１つであり、サンシャイン計画の中でも発足時のＳ49年よりこの研究が開始された。大分大学エネルギー工学科の研究棟は、この計画に基づき大型建物における太陽熱冷暖房の実験建物としてＳ52年度に完成し、翌53年度より運転を開始した。これまで３年間冷房暖房の運転を実施、ソーラーシステム実用化へのデーターを蓄積してきた。今回は、この冷暖房装置の設備システム、制御方式、運転実績をもとにして、太陽熱利用の現状を考えてみたい。

⑩　科学と価値

後　藤　賢　一（九州大学）

科学・技術の発展に伴って、それらの「負の効果」「副作用」といった面、また「地球の有限性」といった問題がでてきて、「科学の価値」についての楽観的な肯定に疑問がもたれ、現代社会の大きな課題になってきた。

そして、そうした課題に対処するために、(1)科学・技術の廃棄をとなえたり、(2)これまでの科学・技術の延長線上での解決を期待したり、(3)新しい総合科学の創造を追求したり、(4)宗教や倫理学の新しい対応を主張したり、(5)科学的な価値観を探求しようとするなどの動きが見られる。

いずれにしても課題が解決に向うためには、より多くの人々、とくに大学人の問題理解と問題意識が必要である。

(2) 雲 仙 分 校

① 巨大科学と科学者

常 石 敬 一（長崎大学）

巨大科学の定義は未だない。

それでも、現在の核融合や宇宙開発は、巨大科学であろう。今日、一応誰からも巨大科学であろうと考えられているものは、すでに失敗に終ったモホール計画ほどではないにしろ、成功の見込みの少ないものが多い。そのため、「ミンナでやればコワクない」と巨大化して、寄ってたかって研究しているのかも知れないが。

外側から見て、成功の見込みの少ない分野で研究を行なっている科学者の意志、および研究意欲はどんなものだろうか。もちろん、どんな分野の科学者でも、はじめから成功が約束されている課題に取り組むことはないし、その必要もないだろう。

② 近代ヨーロッパの魔女狩りとその歴史的背景

志 垣 嘉 夫（九州大学）

ルネサンス・人文主義、合理主義の時代にあたるヨーロッパ16・17世紀は、魔女狩りが荒れ狂った時代でもあった。神の敵である悪魔、その悪魔の手先とされた魔女は、徹底した女性増悪の思想に貫かれた知識人（法律家・学者など）によって迫害され、数10万あるいは 100万近くの女性が生きたまま焼かれて死んでいったと言われる。このことは、近代ヨーロッパ人ひとりひとりが自分の心のなかにたえず敵を作りだしてゆかねば心の平和を維持することができなかった事情を明らかにするものである。キリスト教国だけにみられた魔女狩りという集団妄想の歴史的形成過程とその背景に的を絞って、ヨーロッパ近代社会の特質を考えてみることにする。

③ 音 楽 と 社 会

― 現代社会における音楽の意味について ―

垣　内　幸　夫（宮崎大学）

現代は音楽の氾濫の時代である。ありとあらゆるジャンルの音楽が、マスメディアを通して日夜、私たちに襲いかかってくる。

W. BENJAMIN は『複製技術の時代における芸術作品』の中で、「芸術作品の複製技術は、芸術にたいする大衆の関係を変化させる」と予言した。半世紀後の今日、マスメディアの発達は、おそらく彼の考えた以上の変革をとげ、私たちと芸術の関係を消費者と商品の図式に置きかえた。ここでは大量消費されうるもののみが価値を持ち、絶えず私たちを侵蝕する。私たちは自らの嗜好によって音楽を選択し享受するのではなく、他者の意思による音楽の消費を強いられている。私たちの音楽感性は自らの意思によって支配されなければならない。マスメディアによる感性の組織化は、一体私たちを何処へ連れて行こうとするのか？

④ 現代の健康観についての一つの考え方

徳　田　修　司（鹿児島大学）

ひと昔前、日本にもセリエのストレス学説が紹介された。それ以来「ストレス」という言葉は、だれもが健康状態について語るときの代名詞のようになっている。この「ストレス」とは、本来生体に対する刺激源のことと、それらによって引きおこされる生体の防衛的反応（適応反応）の両方の意味を含んでいる。生体は種々の刺激に反応し、その種類や持続時間によっては、うまく適応することもあれば、逆に適応しきれないこともある。ストレスを生物科学的に解釈し、生活の中でうまく利用することも必要である。身体運動を生体に対する刺激源としてとらえ、このストレッサーによる生体の防衛的反応（適応能）をまず現象論的にとらえ、そのメカニズムを追求し、また、獲得された適応能の生体にとっての意味などを検討することは、多くの点で意義のあることだと考える。

⑤ 価値観の多様化と現代社会

根　井　康　雄（九州芸術工科大学）

問題１．現代社会における価値観の多様化の現象が屢々指摘されるが、これは事実か。事実とすればどれほどのひろがりをもつか。この問題の考察にあたっては、価値観の種類、例えば(イ)趣味、芸術(ロ)個人倫理、人生観、(ハ)社会倫理、イデオロギー、などを区別することが必要であろう。また、多様性をはかる範囲としては、(イ)日本、(ロ)全世界の２種がある。

問題２．多様化がもたらす結果は何か？それは個人間、グループ間の断絶や衝突を増大させる傾向をもつか？多様な価値観の間の協調、共存は可能か？

⑥ 女性の社会的権利について

— 労働関係における問題を中心に —

深　山　喜一郎（九州大学）

1975年の国際婦人年世界会議において男女平等実現のための行動指針「世界行動計画」が採択されて以来、わが国でも女性の社会的権利・役割について論議が盛んである。

とくに労働関係では従来、賃金差別の他、若年定年制、結婚退職制など女子労働者に対する差別的制度が少くなかったが、これらは裁判上あるいは行政指導上、少しずつではあるが是正されていく傾向がある。しかし、反面労働基準法中の女子労働者に対する特別保護規定については、いわゆる「過保護」論も強く、その見直し（削除）が提唱されている。

果して平等の要求は保護の切捨てを不可避的なものとするのか――この問題を最近の最高裁判所の一判決（日産自動車事件、昭56・３・24判決）を手がかりにして考えてみることにする。（判決文は議義当日配布する。）

⑦ マルチ・イメージシステムと現代教育

ロバート・アダムス（宮崎医科大学）

化学的・機械的発達に伴って、現代の大学生は技術に非常に詳くなった。教育にこの現代技術を使

わないと先生は学生の期待を満足させることが出来ぬ。

授業に機械を使うといろいろな問題が出て来る。予算がたらないし、上手に使うことが出来るまでに時間がかかるし、複雑で壊れやすい。

比較的簡単な機械だったら、問題があまりないはずである。安くって、簡単で、しかも効果が高いシステムとして、映写機2台の自由自在画面転換マルチ・イメージシステムは、どんな授業にでも使うことが出来る。

このようなシステムの仕組と使い方を見せながら、機械と教育の関係を論じたいと思う。

⑧ タイ北部山岳民族の社会

比　嘉　政　夫（琉球大学）

タイ国北部、ビルマ・ラオスと国境を接する地域、特に山地にはヤオ族、メオ族、アカ族など個性ゆたかな種族文化をもつ人びとが住んでいる。ひとつの尾根をこえるごとに、異なった種族の村落をみることがあり、多彩文化が軒を接するように共存しているのをみることができる。

本講義はヤオ族を中心に、タイ山地に住む民族の、結婚の習俗、家族の構造など社会生活の様子を文化人類学の視点から紹介するものである。

ヤオ族はもともと中国の中南部に住んでいたが、漢民族の勢力拡大にともない、その一部が焼畑移動耕作をしながら、東南アジア大陸部へ南下してきたといわれている。その習俗のなかには、漢民族とその周辺諸民族の文化的関わりを考えるうえで、貴重な資料となるものが多い。（スライド使用）

⑨ 虚構と小説

野　口　健　司（九州大学）

小説とは虚構の枠組のなかで真実を語るものといえる。小説家は、自己のイマジネーションにもとづいて現実を虚構的に再構成し、それをより普遍的な現実として表現する。その場合、虚構の枠組は真実らしさの相のかげに隠ぺいされるのが普通である。ところが、最近の作家達は虚構を虚構として真実を語り始めた。このことは、現実についての価値観に普遍性が失われたことと現実が再現に価いしない程までに混とんの度合いを深めたことを示す。

科学的真理が明らかにしたものは人間のけし粒的卑小さであり、われわれは虚構を信じることによってのみ人間の偉大さを回復できると説くアメリカの現代作家、カート・ヴォネガット・ジュニアを取り上げて、現代における虚構の意味を考えてみたい。今日の状況を理解する手がかりになれば幸いである。

⑩　今日のオーストラリア事情

金　子　光　茂（大分大学）

広範な題目を掲げた意図は、英米と同じ英語文化圏にありながら我々に比較的になじみの薄いオーストラリアに就いて、多面的且つ多角的にオーストラリアを概観し、今日のオーストラリア社会の実情を知ってもらおうとする事にある。

触れる事項は、オーストラリアの歴史、風土（動植物を含む）、経済（農鉱業）、対日貿易、政治形態、日本との歴史的関わり、オーストラリアの教育制度など、多項目にわたる、90分の限られた時間で、如上の各事項に詳細に立ち入ることは、まず不可能であろうから、勢い観光案内的にならざるを得ない。用意するスライドが益々この傾向に拍車をかけることになろう。従って、若し聴講者諸氏がこの講義に何らかのアカデミズムを期待すれば、その期待は見事に裏切られるであろうことを覚悟しておいて頂きたい。

⑪　文学から見たアメリカ社会

中　島　最　吉（熊本大学）

文学に投影されたアメリカ人の思想を文学史的に辿りながら、現代アメリカ社会の諸問題を考えてみたい。旧大陸に対する一つのアンチテーゼとして建国されたアメリカが、フランクリンの時代にプラグマティズム的発想を身につけ、独立宣言を経て、十九世紀後半にはホレイショー・アルジャー的「アメリカの夢」が歓迎されるようになる。その「夢」も20世紀に入ると、ドライサーの「アメリカの悲劇」に見られるように「不健康な」夢に変り、現代ではむしろ「悪夢」になっているのではないだろうか。30年代の左翼文学からアメリカがどのように脱け出したかを検討することを手はじめにして、アメリカ人の思想的な特徴が「アメリカの夢」という足かせをはめられていることを確めてみた

い。

⑫　文学と社会参加

小　柳　保　義（佐賀大学）

「アンガージュマン（社会参加）」という語が作品や作家のある特殊な傾向を指すものとしてフランス文学史に登場するのはかなり最近のことであり、特にサルトルらに関して用いられることが多いが、この語には広狭両様の意義があり、あらゆる文筆活動が広く社会生活に関与しているという広義においては、時代を問わずすべての文学をアンガージュマンの文学とみなすことができる。また、これを、文学者が創作行為の枠を越え、政治活動に身を挺することによって、自己の奉ずるイデオロギーの達成を図ろうとする態度と狭義に解しても、その例は実存主義文学の出現するはるか以前から、とりわけ19世紀のロマン主義時代に数多く見出されるものである。それらを例示しながら、フランス作家における社会参加の実態を探り、あわせてその面での日本文学との対比にも触れてみたい。

3．参加学生の感想

〔長崎大学薬学部１年・**吉田　広美**〕

楽しかった合宿が終わって、もう１週間になろうとしています。この５日間の体験は、私にとってすばらしい思い出です。

私は、雲仙分校に参加しました。そこは、雲仙の温泉街のはずれの緑に囲まれたところでした。

もう二度と聞けないような他の大学の先生の講義は、よい勉強になりました。講義のあとの討論会は、もう少し活発な意見を出し合ってもよかったんじゃないかなあと思います。

登山は、道が急で、きつかったです。頂上まで登らなかったのと、道に迷って、降りる時間が大幅に遅れて、島原分校の人たちと会えなかったのは、残念でした。

そして、最後の夜のコンパー各大学ごとの出し物が、とてもおもしろかったです。先生たちと語り合いながらお酒を飲んだのもよい思い出です。

全体的に、かなりのハードのスケジュールだったと思います。もう少し余裕があったらいいのにと思いました。

この５日間で、他の大学の学生や先生がたと仲よくなれ、この合宿で、私が得たものは、とても大きかったと思います。

〔九州大学・法学部１年・**鹿嶋　正紀**〕

当初は長いように思われた４泊５日の合宿共同授業も、今振り返るとまさしく夏の日のできごとである。それは、短いけれど本当に充実した日々であった。下界の猛暑を避けて、雲仙の涼しい高原で授業その他すべてのことにあれだけ夢中になれたのは、ここ最近の私にはなかったことであり、今思い出してみてもあの時の興奮と感激で胸が高鳴るのを感じる。

この合宿共同授業の趣旨には様々なものがあると思うが、共同授業であるからには、やはり授業をその中心に考えなくてはならないであろう。今年のメインテーマは「現代社会の諸問題」ということであった。授業内容については、私にとっては満足できるものであったように思われる。日頃の授業では聞けないような講義もあり、大変興味深かった。だが、特に注目すべきことは、講義についての自由討議の時間が設けられたことであろう。日頃一方通行的な授業しか受けられない我々教養部の学生にとって、このゼミナール形式の授業は極めて貴重な経験だったと思う。

そして、もう一つ、忘れてはならないのが、他大学の学生や教官との交流である。私としては、授業よりもむしろこちらの方の意義が大きかったように思う。日頃は離れた存在である大学教官から、教官と学生というわくを越えて、人生の先輩としての貴重な経験や知識や考え方を直接聞くことができたことは、何物にも代え難い事だと思う。また、琉球大学の学生と交流できたことも貴重な経験だ

ったと思う。琉大の学生から沖縄の現実を聞いたとき、私は自分に欠落していた視点を鋭く突きつけられたような気がした。我々はもう少し沖縄へ目を向けるべきである。

いずれにしても、この合宿共同授業は私にとって大変有意義であり、今後の私の人生あるいは学問にはかり知れない影響を及ぼすものだと思っている。

〔大分大学・教育学部・4年・**原田　孝司**〕

今回の共同研修に参加してとても良かったと思う。まず第一に、いろいろな地方の学生と話すことができた点である。特に琉球大学生と話したのは初めてであった。沖縄の持ついろいろな問題、例えば米軍基地の事、特に最近問題になっている核の存在など彼ら彼女らの体験もまじえた話はとても考えさせられるものであった。彼らの話を聞いた限りでは、核は存在していることは疑う余地もないと感じた。そして、彼らはそれに対してどうして対処していけば良いのかということが、これからの沖縄、日本の将来を考える場合の一過程だと考えている。沖縄という地方は他の地方には無いいろいろな問題をかかえている。そこに住む一住人として、また、学問の府としての大学に籍をおく一学生として、それらの問題に真剣に取りくんでいこうとする彼らの姿勢に考えさせられた。また、余談ではあるが、コンパの席において、あの独特の陽気さ、バイタリティーはどこからくるものだろうか、あの焼けつくような日射の中で生きている人達のすばらしさである。

各大学の先生方の講義を受けて、とても良かったと思う。十数名の各大学の先生方の講義はたいへん興味深く聞くものばかりであった。また、夜の分科会においても各先生独特の雰囲気でとても楽しいものであった。

教師を目ざしている私にとって、教師とは子どもに自分の生きざまを見せるものであるということが実感として分かった。

この講義を一般教育として受講したわけだが、全ての講義を受けて、九州大学の後藤教授の言われるところの、一般教育の意味、必要性というものを考え直してみたいと思った。

これからもこんな機会には、ぜひ参加したい。

〔佐賀大学・理工学部・2年・**磯部　洋介**〕

この共同研修に行くきっかけとなったのはやはり、単位が欲しい！という願望で；もし、佐賀大学は単位を与えないということであれば、僕はこの合宿には参加していないと思う。しかし、今となっては単位のことぬきで合宿授業に参加してよかったと思う。多分、これは一生のよい思い出になると思う。内容はといえば、昼は教官とともにマジメに勉学にとり組み、夜になると人が変ったよう？に酒と友達になる。ある人が言ってたけれど『酒を飲んで単位もらえるといえばこれしかない!!』と強く言っていた。この言葉は、はじめはピンとこなかったけれど、2日3日が過ぎてゆくうちにしみじみと体感させられた。

設備の面でも一応一通りの体育設備は整っていたので満足であった。こういう山の中で同世代の仲

間といっしょに生活するというのは高校時代の修学旅行以来である。酒を飲みながら、これからの事自分の歩んできた道など、本音をさらけだして話すときなどは、親父と違った面があって友達と語り合うことの大切さというものも分ってきた。

この合宿での経験は、後になって自分にプラスの面が多大!?多少は出てくるのではないかと思う。こういう機会は、大学、企業に入ってからは少ないと思うので大切にしてゆきたい。

〔福岡教育大学・2年・**広塚　由美**〕

我が大学ではこの研修の単位が認定されないので、他の多くの学生と異なり、「現代社会の諸問題」というメインテーマに興味をもったからといった純粋な（？）動機で研修に参加した。ところが講義の内容のほとんどはメインテーマと全くかけ離れたものであり、とても関心をよせられるものであるとは言い切れなかった。講義に対する期待はもののみごとに裏切られたわけである。教官→学生の一方的な形式を、もっと学生側からも問題提起をなし得るようなディスカッション形式に改めれば良くなるのではないだろうか。そうすれば抽象化されたものから、学生の身の回りにあるようなより具体的問題へと迫っていけるだろう。

しかしながら参加したことによって得たものは予想以上に多かった。何と言っても日ごろ接することのない他大学との交流である。自分と同じような悩みや体験をもった人々が他大学にもいるんだという安堵感を覚えると同時に、各大学の連帯意識を持てたことは貴重なことであった。

個性的でユニークなスケールの大きい人と多勢知りあえたことによって、これまでの自分の持っていた学生生活に対する意識や将来に対するものの考え方を大きく揺るがされたような感激的な出会いであった。現時点において、また、将来においても意義のある4泊5日間であった。

〔宮崎大学・教育学部・2年・**大迫美保子**〕

この合宿に参加しなければ、おそらく一生会うことのなかったであろう人たちと、こんなにも親しくなれたということが、やはり一番嬉しい。深く接することができたかどうかという点では、あまり自信がないし、合宿に参加した学生のうちで、一度も話していない人がいるということは、残念なことです。けれど、去年参加したわたしの友人がそうであったように、わたしも少し心が豊かになったような気がします。

勉学の面での収穫も多くありました。自分の周囲をもっとみつめて、深くつきつめていく……　自分の考え方が、いかに浅はかなものであったか、そして、その気になりさえすれば、学問というものは、どこにでも見出すことができるのだということを痛感しました。本題であるはずの「現代社会の諸問題」に関することよりも、さまざまな人との触れ合いの中で得たもののほうが、多分、大きかったでしょう。

何はともあれ、実に楽しい4泊5日間の合宿授業でした。宮大からの参加者は、単位の関係もあってか、例年少ないのですが、まったくもったいない、大いに宣伝して、来年は定員一杯参加させたい

と思っています。

では…　また会おうネ！

〔九州工業大学・工学部・２年・**村岡　一男**〕

自分の大学がこのような企画にあまり関心がなく、全くどういうことをやるのかもわからず来たのですが、非常に有意義だったと思います。他大学の人達との交流ができる、特に九州には特徴のある大学が多いので非常に面白かった。視野を広げるためにも実によいことだと思いました。「勉強」というよりは、「交流」が目的のような感じがしました。１人で来たので始めは、かなり、肩身のせまい思いがしましたが、終りの各大学催し物では他大学に手伝ってもらったりして非常にうれしく思いました。やはり１人で来るとどうもパワー不足みたいで、５人くらい来ると、その大学の特徴を出せるようにはなるので大変おしいことをしたような気がします。どうも他大学の方がずっと特徴を持った連中が多いみたいで、自分がかなり単一思考的人間になっていたような気もした。本当の事を言うとこのような催し物にはぜひ参加してほしい。何しろ費用が安くてこういう楽しい事が出来るのだから。４泊５日という短い期間であったが、非常に楽しく過ごせたと思います。正直言って一人で来た方がよかったかもしれません。

〔鹿児島大学・医学部・２年・**牛島　　孝**〕

私は前回に続き２度目の参加です。それは、今回私のクラス担任の先生が、合宿授業に参加され講義されるという事もありましたが、やはり、この合宿共同授業の目的（略）のすばらしさを求めての参加でした。２回も参加でき、大変幸運で、良かったと思っています。

この企画を絶やすことなく続け、さらに、りっぱなものとするため、私の気づいた点を述べてみます。毎回あがると思いますが、合宿共同授業の目的を完全に達成するには、スケジュールがハードであると考えます。予算の面、その他の犠牲を強いられても、あと１日増せないものでしょうか。次に場所・宿舎についても検討が必要だと思われます。

今回、教養部長会議が持たれたかどうかは知りませんが、参加12大学の一部の大学に任せきりのように見うけられます。各大学とも、今後一層、この企画への認識を高めてもらいたいと思います。

本来こういう企画は学生の手で行うのが理想だと考えますが、学生は単位を目的として参加するのではなく、また、ただ楽しかっただけで終るのではなく、何故そうなのか、この非常に貴重な経験を大切にし、そのために考えてほしいものです。

最後に、企画、運営に御苦労された方々に深く感謝し、共同合宿授業の発展をお祈りします。

4．「第6回合宿共同授業」を振り返って

(1) 反省と展望

雲仙分校オーガナイザー　安　東　　毅（九州大学）

今年度から九大と共に2分校の一方のお世話をされる当番校が、熊本大学から長崎大学へと変った。そのこともあって、合宿共同授業の開催地も、今回は第2回以来4年間住み慣れた九重を離れ、この共同授業発足の地島原――とはいえ、2分校制のため雲仙と併用――へと舞い戻った。私は昨秋頃までは、この授業も5ヶ年の歴史を経てきたし、この開催地や当番校の変更を機に、今回ぐらいからは多少とも新機軸を授業企画上で打ち出したいと、意気込んでいた。しかし、私にとっては、国立大学研修所以外の、それもはじめて使用する民間営業施設の利用ということで、開催のための交渉や準備に忙殺され、結果としては例年とあまり変らぬ共同授業――いやむしろ昨年の公害・環境問題のようなコア・カリキュラム（九重分校）すらも編成できずに終ってしまったことを、非常に残念に思っている。また、この民間施設での分校運営の経験を通じて、おそまきながら、昨年まで民間の施設で分校運営をされてきた熊本大学の関係者の方々の御苦労のほどを、実感として感じることができたと思っている。

以下、今回の合宿授業を振り返って感じたことを、以下二、三述べたい。その第一は、例年のことながら、もっとある特定のテーマでまとまった授業企画ができないかと、いうことである。現行の各大学よりの講師推薦が先で、その講師の範囲内でしか企画の自由度がないという状態をどう改善すべきか。これは一つの課題であろう。

第二は、今回の場合極端であったが、一般的に自然科学系の講義が少くないことである。これは、今日の日本での後期中等教育での理科学習到達度を前提とした、文・理両系共通の合宿授業向けの自然科学系の短かい講義がむづかしい、ということであろう。たしかに一般に段階的に積み上げた情報を前提とする自然科学系の講義では、90分ぐらいの「単発もの」はやりにくいであろう。しかし、合宿授業の内容面でのバランスや授業負担の学科間公平さを考えるとき、今後自然科学的内容の講義も、各参加大学間で積極的に開発されるべきであろう。

第三に、今回の授業での登山は雲仙の普賢（ふげん）岳登山であったが、全体が樹林のなかの登山道で、眺望が悪く、学生には不人気であった。その点では、山としては女性的だが、昨年までの九重山の方が、眺望が良くてよい。私は、九州地区の国立大学間合宿共同授業の開催地としては、現状での各大学か

らの距離、施設設備、自然環境などの諸条件を考えるとき、昨年までの九重が最適地と考えている。

将来、霧島が阿蘇に立派な施設ができれば別だが、これから先当分の間は九重を合宿授業の開催地として固定し、むしろ企画内容や運営の改善、充実に力を注ぐべきではないかと、私は考えている。

九大教養部からのオルガナイザーは、来年度より私に代って有能な先生が新しく登場されることになる。私と違って、この合宿授業に新機軸を盛り込んで下さるものと期待して筆をおきます。

島原分校オーガナイザー　比　良　俊　典　（長崎大学）

普段、一般教育の一部を担当しながら、関連した学科の講義を受講できるチャンスに恵まれないので、今回の「授業」は私に裨益する所大であった。

講義は演習を別にすれば、おおむね一般教育の各専門分野に亘っていて、総合性があったことがそれまた、各専門分野の講義もメイン・テーマを志向しつつ、実によく準備がなされていた。突き込みもあり、密度がある内容だったことが別のそれ。

同じ今を生きる人間でも、共通の関心や問題意識もあれば、こういう点についての個人差も無論あるので、私は私なりに受講できた講義から、問題を考察する参考にさして頂きたい。

この「授業」は学生の参加人員に制限があるので、「ゼミ」を利用して、普段行いにくい予習をこういうチャンスに活かして討議に臨めば、受講した講義についても理解がより深まるように思われる。

同一大学内の授業ではないから、例えば参加学生の決定が、「授業」開始に近い時期になっているなど、幾つかの困難が予想されるものの、できれば早目に講義内容の簡単なレジュメを、あらかじめ学生に配布しておけば、「ゼミ」も余程違ってくるのではあるまいかなどと思うのは私一人であろうか。

この「授業」は一定の人数で行われる合宿で、かつ九州地区の国立大学間の共同授業であるから、「交歓」という、普段えてして実施ができかねているコミューニケイションを行うに恰好の機会であることはいまさら言うを俟たぬ。四泊五日の日程は、講義を中心とした企画である以上、そういう角度からする「交歓」であっても、格別人間的な触れ合いが稀薄になるというようなことでもあるまい

島原の研修センターは、自然の懐に抱かれ、私の知らぬ鳥の囀りも耳にすることができるような環境。設備、食事も良好であった。

最終日の「反省討議」に臨んで、メイン・テーマと講義の関連の度合い、および講義の専門性について、学生諸君の受け止め方はまちまちの印象を受けた。また圖書の問題も私はあるように思うが、

「交歓」については、学生諸君の評価がほぼ一致していたように思えた。この点、教官の発言と学生諸君のそれの間には多少のズレがあるやに感じられた。また、一部の学生諸君と思うが、センターでの生活について希望があるような印象も受けた。

あれやこれや、実務を担当して力量不足を痛感した次第です。

(2) 感 想 文

比 嘉 政 夫 (琉球大学)

合宿共同授業というものについては、前に参加したことのある教官から話をきいて、少なからぬ関心をもっていたので、教養部学務係から連絡があったときふたつ返事でひきうけたのである。

琉球大学からは28名参加したが、私は14名の学生とともに雲仙分校の授業に参加した。琉球大学は御存知のとおり、九州本上から遠くはなれた島の大学である。その島嶼性からくる孤立感というのは学生も教官もひとしく感じているものであり、だから、毎年共同授業に多くの学生が参加を希望するのかも知れない。教官も学生もある期待感をもって参加する。おゝげさにいえば他流試合にのぞむ心境である。学生のなかには、沖縄とはことなる自然環境にはじめて接するのもいる。山登りをして亜熱帯の島にはない植生にふれることも貴重な体験である。

講義はいろいろな分野からの提言を含み、どの講義も興味深く大変勉強になった。ただ講義直後の質疑に学生の意見が少なかったのは残念であった。時間の制約もあったかも知れぬが、教官同志の質疑もあってよいのではないかと思う。専門分野が異なるので微妙な遠慮があるかも知れないが、学会ではないので素朴な質問でもよく、それが学生たちへの刺激になるかと思うからである。

授業のおわった夜のコンパには、学生たちは積極的な質問や意見を出してくれて、膝をつきあわせての討論はたのしかった。

テーマが広すぎる、大きすぎるの感想もあったが、事前の打ち合わせを密にすることでその不満も解決できると思う。

近い将来、沖縄で合宿授業ができることを夢みている（実現は予算次第であるが)。

末尾ながら、運営にあたられた当番校の九州大学、長崎大学の方々、また今回も、分校までのバスの手配などお世話下さった鹿児島大学教養部の教官、事務官の皆様に心から感謝申しあげる。

田　原　靖　昭　（長崎大学）

4泊5日のスケジュールの内容は正直にいってハードであった。それは特に、夕食後の「自由討議及び、分科会形式によるゼミ」による深夜いや朝まで続く自主的スケジュールによるものと思う。この時間が学生諸君にとっては、最も充実していたのではないだろうか。所期の目的の半分（寝食をともにし……交流を深め）は、十分達成されたものと思う。誰れともなく言われた3泊5日の感が強かった。

「自由討議及び分科会形式によるゼミ」では、エネルギーシュな若人の集団生活で、学生教官ともども、少々の暑さ、睡眠不足、アルコールが重なり、感性のボルテージが上がっていたようだ。そのせいか、今までの大学生活では味えなかった学生同志、学生と教官の親交が深まり、〝意気相投ず〟の感が強かった。私自身、島原に着くまでの気持の重さもふっとび、来てよかったと、多いに雰囲気に浸った1人であったことは言うまでもない。

もう1つの目的である「研修」について学生諸君はどうだっただろうか。「交流」に比べると「研修」には少々エネルギーが足りなかったような印象をもった。私自身にとっては、久しぶりに学生時代にもどったようで、自分の専門と離れた学問のエッセンスを聞くことができ楽しい時間であった。私も全講義に出席し、講義は統一テーマと多少離れた内容もあったか、むしろその方が興味深く拝聴できた。ただ残念だったのは、学生諸君同様、睡眠不足のためいねむりしたことである。

島原会場の利点を生かして、早朝、学生とテニスで汗を流し、気分爽快で講義し、テニスを通してまた別の意味で交流も深まった。次回はせっかくの施設をもっと利用する計画も必要だろう。雲仙登山では、琉大の学生諸君が天然の氷を手で感触を楽しみ頬にくっつけているのが印象的であった。登山中に気になったのは、多くの学生の〝呼吸の乱れ〟であった。

最後に一言、今回の共同授業では、裏方さんとして事務官のご協力が大であったことを申し伝えておきます。

小　沼　　新　（宮崎大学）

はるか20年も前に、こんな歓喜があったような気がすると思いながら、4泊（3泊？）5日を過ごしました。日頃、さめた感覚で学生諸君に接する年代に達してしまった私にとって、同じ宿舎で寝起きし、共に学ぶということが、こんなに楽しいものなのかと感慨深かったのです。参加して良かったと思うことしきりです。私自身の授業は、トップバッターの一コマで、物足りなかったのですが、夜

のゼミナールや反省会（飲み方）の時間には、学生諸君のホンネに接する事ができ満足でした。タテマエを前面に出して生きる日常生活の中に、やはり「若きウェルテルの悩み」を内包している姿を見ることは、嬉しいものです。もっと悩み、苦しんで欲しい、そしてこの機会にこそ、現代社会のシラケの中で、誰もが感ずる「悲しみの共有」を充分にやって欲しいと願うのは、私ばかりではなかったと思います。

始めて、この合宿授業に参加して、私は大きな収穫をあげました。それは、私自身が学徒となって、他大学の諸先生の授業を受けることによって、タコツボの中で悦に入っていた自分を恥らいを持って見つめなおせたということです。どの先生も与えられた一コマの授業の中に、それぞれ蘊蓄を傾けられて、大切に自説を平明に展開されました。大変感動し、良い刺激を受けました。感謝しています。自然科学、哲学、文学、歴史学とあらゆるジャンルの登場は、さながら島原ユニバーシティの感を深くしました。

最後の夜一睡もせずに迎えた朝焼けの中で、よく遊び、よく学んだ充実感を一人噛み締めた合宿所の想い出を、大切にしたいと思います。単位になるかどうかは、二の次の問題でしょう。学生諸君にもっともっとこんな機会を与えたいものです。

万事そつなく御世話いただいた長崎大学の先生方、事務の方々に御礼を申しあげます。

宮崎大学から参加した２人の女子学生、２人とも、その後学問〇〇にますますがんばっています。彼女等も会うと必ず合宿の楽しい想い出ばかり話しています。

5．参加者名簿

(1) 雲仙分校

① 教職員

九州大学

教養部長　深山喜一郎
教　授　安東　毅
〃　野口健司
助教授　園田五郎
〃　志垣嘉夫
教務掛長　足利　晋
事務官　錦戸健二
技　官　鶴田信義

九州芸術工科大学

教　授　根井康雄

佐賀大学

教　授　小柳保義
事務官　島田栄一

長崎大学

助教授　常石敬一

熊本大学

助教授　中島最吉
〃　鈴木蓮一

大分大学

講　師　金子光茂

宮崎大学

講　師　垣内幸夫

宮崎医科大学

外国人教師　ロバート・アダムス
事務官　大倉野龍雅

鹿児島大学

助教授　徳田修司
事務官　二宮孝典

琉球大学

教　授　比嘉政夫

② 学生

九州大学　(20人)

1　鈴木敦典(文)
2　宮内　清(教育)
3　田中　禎(教育)
4　鹿嶋正紀(法)
5　谷口浩一(法)
6　中村泰士(法)
7　高次哲雄(法)
8　岡田直澄(経済)
9　原口明久(経済)
10　豊永博一(経済)
11　立原裕司(理)
12　宮田かおり(理)
13　徳元康人(理)
14　濱崎康成(工)
15　牧野謙二(農)
16　四宮　亨(歯)
17　鹿島光司(歯)
18　河野基子(医)
19　山下昌子(医)
20　波多江智子(医)

九州芸術工科大学　(6人)

1　松本成樹(芸工)
2　鹿子島直子(芸工)
3　石田裕滋(芸工)
4　北川哲朗(芸工)
5　満田秋彦(芸工)
6　武田賢司(芸工)

佐賀大学　(9人)

1　池田篤司(教育)
2　永原吉弘(教育)
3　成瀬亮司(教育)
4　高尾憲治(教育)
5　濱田明美(教育)
6　釘本尚美(教育)
7　吉田京子(理工)
8　山浦智鶴(農)
9　大渕隼人(農)

長崎大学　(7人)

1　黒崎　淳(教育)
2　川崎昌子(経済)
3　吉田広美(薬)
4　井上　淳(工)

5 小無田　興（医）
6 坂井裕之（医）
7 加藤茂樹（医）

熊本大学（7人）
1 出水洋一（教育）
2 成安玲子（教育）
3 菊池美都江（教育）
4 田代周史（理）
5 三好克彦（理）
6 田畑清霧（理）
7 吉村みさ（工）

大分大学（4人）
1 足立泰彦（工）
2 篠木武虎（工）
3 三浦弘康（工）
4 矢野幸博（工）

宮崎大学（3人）
1 高橋光子（教育）
2 新名紀子（教育）
3 中林健一（工）

宮崎医科大学（1人）
1 宮田幸雄（医）

鹿児島大学（8人）
1 高橋　健（教育）
2 山岸健一（教育）
3 狩俣栄人（法文）
4 原田成美（法文）
5 伊藤　隆（農）
6 當　直樹（農）
7 谷川浩史（水産）
8 牛島　孝（医）

琉球大学（15人）
1 今村美雪（教育）
2 二宮　聡（教育）
3 栄　さゆり（教育）
4 北岡哲治（教育）
5 新垣勝子（法文）
6 田中耕一郎（法文）
7 荻堂盛修（法文）
8 佐久川政昭（法文）
9 富盛由美子（法文）
10 荷川取明美（法文）
11 照屋直美（法文）
12 照屋　健（法文）
13 大城きよみ（法文）
14 北沢久和（理）
15 大野律子

(2) 島原分校

① 教職員

福岡教育大学
教授笠　栄治

九州大学
教授後藤賢一

九州工業大学
教授野田　寿

佐賀大学
教授前間良爾
事務官古賀龍志

長崎大学
教養部長高橋　清
教授比良俊典
助教授田原靖昭
教務係長小野和三朗
事務官坂口　豊
〃　山下敏夫

熊本大学
助教授北川浩治

大分大学
教授岡田英彦

宮崎大学
助教授小沼　新

鹿児島大学
助教授新田栄治

琉球大学
助教授今塩屋隼男

② 学　　生

福岡教育大学　(2人)

1 波多野 朋 子(教育)
2 広 塚 由 美(教育)

九 州 大 学　(24人)

1 横 山 多寿子(教育)
2 北 島 宏 信(経済)
3 横 井 俊 哉(経済)
4 桑 原 和 彦(経済)
5 大 成 義 秀(理)
6 高 橋 義 人(理)
7 川 崎 功 博(理)
8 高 山 裕 貢(薬)
9 三 村 剛(工)
10 村 田 賢 二(工)
11 福 島 誠 治(工)
12 上 野 智 裕(工)
13 川 江 隆 文(工)
14 池 田 幸 治(工)
15 森 俊 美(工)
16 阿 部 秀 徳(工)
17 福 地 弘 行(工)
18 福 原 由 久(工)
19 鵜 木 正 美(農)
20 生 田 六 也(農)
21 松 尾 俊 治(農)
22 梅 津 喜 治(農)
23 中 島 裕美子(農)
24 青 木 康 明(医)

九州工業大学　(1人)

1 村 岡 一 男(工)

佐 賀 大 学　(12人)

1 松 尾 茂 昭(教育)
2 古 賀 恵美子(教育)
3 本 山 秀 敏(経済)
4 高 着 英 幸(経済)
5 中 野 航 一(理工)
6 川 尻 理 恵(理工)
7 佐々木 修(理工)
8 出 口 博 昭(理工)
9 山 口 浩 邦(理工)
10 草 野 義 久(理工)
11 磯 部 洋 介(理工)
12 仙 頭 伸 昭(理工)

長 崎 大 学　(7人)

1 小 山 智佳子(教育)
2 西 尾 俊 英(経済)
3 間 越 紀 博(経済)
4 中 島 敦 男(経済)
5 境 晶 子(薬)
6 結 城 朝 路(薬)
7 原 田 敬(医)

大 分 大 学　(5人)

1 川 畑 憲 一(教育)
2 原 田 孝 司(教育)
3 森 迫 さと子(教育)
4 河 野 泉(教育)
5 阿 部 万寿夫(経済)

宮 崎 大 学　(2人)

1 大 迫 美保子(教育)
2 東 美奈子(教育)

鹿 児 島 大 学　(8人)

1 石 貫 ひろ美(教育)
2 藤 森 由 美(教育)
3 松 尾 剛(法文)
4 福 元 明 子(法文)
5 日 高 実 範(理)
6 猪 原 辰 夫(理)
7 古 賀 醇(工)
8 益 田 芳 秀(農)

琉 球 大 学　(18人)

1 吉 木 信 雄(教育)
2 松 本 智 美(教育)
3 近 藤 浩 久(教育)
4 友 寄 洋(法文)
5 宮 平 栄 治(法文)
6 吉 川 奈穂美(法文)
7 貝 原 直 人(法文)
8 南 秀 志(法文)
9 仲 里 ひとみ(法文)
10 与那覇 正 世(法文)
11 久部良 和 子(法文)
12 山 本 浩 文(理)
13 宮 国 透(理)
14 池 間 尚 子(医)
15 小 倉 秀 章(医)
16 神 山 恭 子(医)
17 恩 田 健(医)
18 久 米 盛 夫(医)

6．付　　録

第6回合宿共同授業実施に至るまでの会合等メモ

年　月　日	事　　項	内　　容
55．10．30	打ち合わせ	（長崎大学 高橋教養部長ほか2名、九州大学 深山教養部長ほか1名） ○実施の場所として島原共同研修センターと青雲荘（ユースホステル）を候補地として選んだ。
11.6-7	共同授業委員会―九州地区国立大学教養部長会議	○昭和56年度九州地区国立大学間合宿共同授業（第6回）を55年度と同様2分校で実施することを決めた。
11．20	現地調査	（長大3名　九大2名） ○島原共同研修センター及び青雲荘の施設その他について調査し、打ち合わせを行った。
12．15	共同授業企画委員会	（9大学 13名出席） ○実施の時期及び場所 ○当番校 ○メインテーマ及びサブテーマの原案 ○授業担当教官の推せん ○募集人員及び学生の参加費
56．2．10	打ち合わせ	（長大3名　九大2名） ○参加学生の大学別分校割当人数 ○授業担当教官の分校割振り ○予算要求の骨子
3．18	打ち合わせ	（九大4名　長大3名） ○実施要項案 ○経費所要額 ○講義要旨
4．上旬	予算要求書提出	大学間相互交流教育経費
5．15	共同授業実施委員会	（10大学 16名出席） ○実施要項及び日程表 ○教材、講義要旨 ○参加人員 ○学生の参加費

あとがき

▶第6回合宿共同授業の報告書も、過去5回の実施報告書と同じように、参加者たちから熱い感想が多く寄せられた。この企画の成果は、予想以上のものであるといえる。

▶島原分校では、討論や談論が夜を徹して盡きることなく、ついに「3泊5日」と形容されるほどの交流があった。参加学生の若さとひたむきさが、先生方の熱意と相呼応したからであろう。

▶雲仙分校は、民間営業施設であるため、時間その他にわたる制約があるのみならず、関係以外の宿泊客から苦情が出たこともあって、規律と静粛とを厳守することがひとつの緊急課題となり、好まれない規制の役目をひき受けざるを得ず、交流の雰囲気に浸るゆとりがなかったことは残念であった。しかし、全般的に参加学生諸君が節度をもってくれたことはなによりであった。この分校では、所定の講義および討論、交流のほかに社会生活一般の規律と節度をもプログラムに加わったことになろうか。

▶そうした制約と過密な授業時間数にもかかわらず、第6回合宿共同授業に対して満足であったとする者のほうが圧倒的に多数であったことは望外といえよう。最終日のアンケートの回答において、「大いに満足」20%、「かなり満足」61%、小計81%にのぼった。

▶その理由は、本報告書の感想にみられるとおり、ひとつには大学間交流であろう。出会いとか交流だけが合宿共同授業の本旨ではないはずだが、合宿共同授業の体験過程の中では理屈ぬきに通常のキャンパスライフでは得られない何かが参加者全員に共有できたと確信できる。

▶欲をいえば、講義に続くテーマ別討論がいまひとつ盛り上がらなかった。しかし、これは、改善策がいくつか考えられる。九州大学の参加者が、後日、反省会を開き、この点について長時間にわたる意見交換を行なった。その折にも、貴重な提案と意見が寄せられた。たとえば、講義要旨とともに、数冊の参考書を揚げて事前に配布する。など、教官、学生相互のよいいっそうの努力で現実的改策等が実施され、より充実したものとなっていくものと確信する。

▶この報告書のために、多くの教官、事務官のお助けをいただいた。感想文をお寄せ頂いたにもかかわらず、編集予算の都合上、割愛せざるをえなかったものも少なくなかった。お礼とともに、お詫びを申しあげる。とくに、今回は、財政緊縮の折、授業日程表および参加者名簿を従来より小さい活字として、経費の節減を期したことを申し添えておく。

▶本報告書の編集は、九州大学教養部教務掛長足利晋事務官と園田五郎助教授が当った。また、グラビア写真は、おおよそ、錦戸健二事務官（九州大学教務掛）の撮影になるものである。

最後に、参加者各位のいっそうの研鑽を祈りつつ。

〔編集者：園田　五郎(九州大学)〕